

5. 小鍋島・城所編



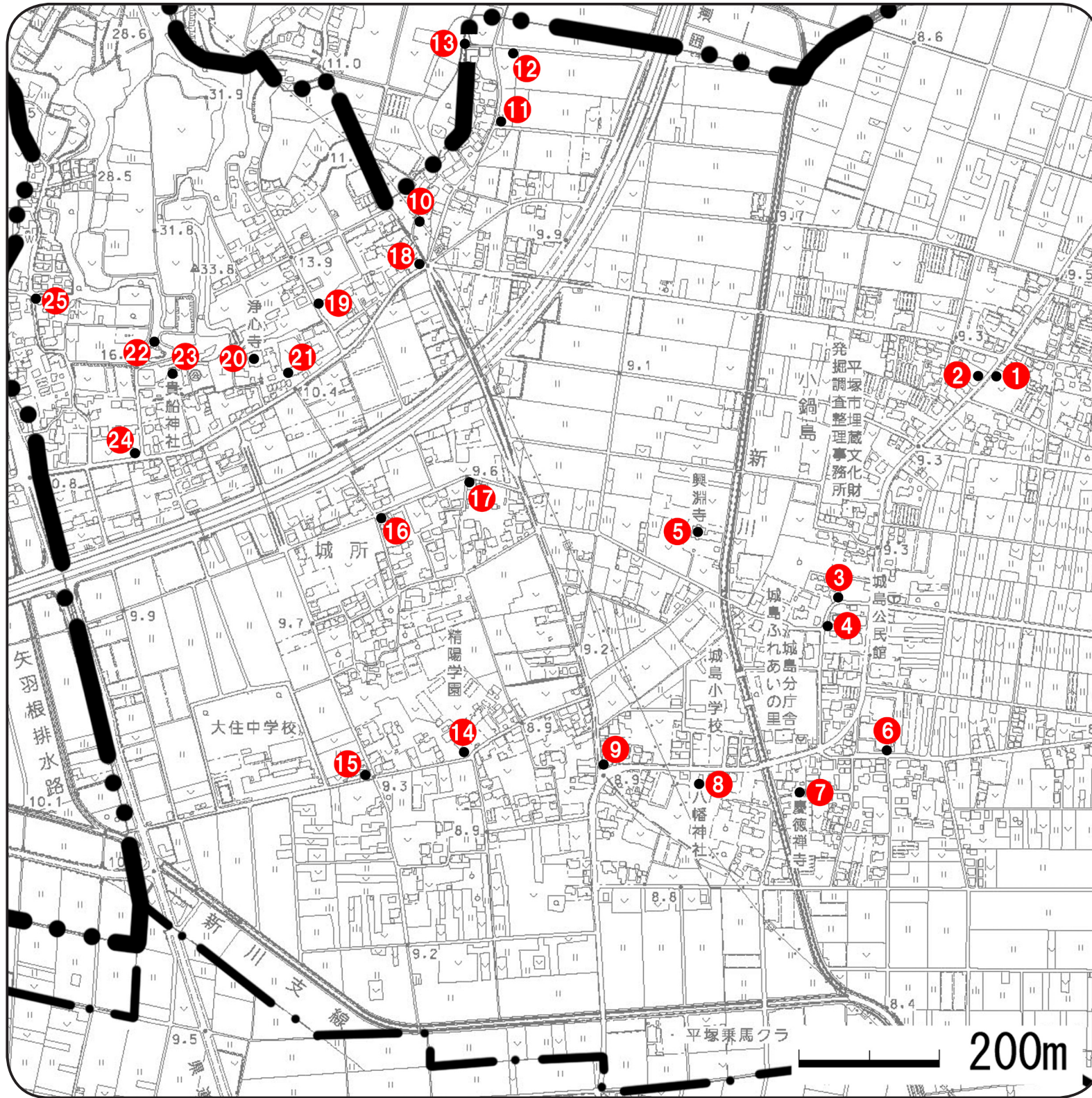
城所 淨心寺 如意輪觀音立像

小鍋島・城所の石仏

城島地区の小鍋島と城所の石仏を紹介します。天保12年刊『新編相模國風土記稿』による小鍋島村の戸数は70戸、城所村は83戸でした。明治22年に下島村、大島村と合併して城島村の一部になり、昭和32年に平塚市と合併しました。

小鍋島は上、中、下、城東に四区分され、それぞれで道祖神を祀ります。鎮守は八幡神社で、例祭は4月第一日曜日。寺院は曹洞宗の興淵寺と臨済宗の慶徳寺、中に地藏堂があります。城東は日枝神社を祀ります。現存する石造物は44基で、特徴は市内の旧村で最多となる7基の道標が建立されていることです。いずれも庚申塔や地藏に道標銘が併記されたものです。

城所は上と下に二分され、上は矢羽根、西町、大門、
岡の根、下は小島と下に分かれ、それぞれで道祖神を祀りま
す。鎮守は貴船神社で、例祭は4月29日。昭和18年に砲
台建設のため城所山から現在地へ遷されました。境内の三面
大荒神社は、観音堂の移転に伴い同所から遷された神社で
す。泣き荒神といわれ、夜泣き封じの神として知られていま
した。城所の旧家は曹洞宗浄心寺の檀家です。境内には昭和
30年代後半に遷された観音堂があります。現存する石造物
は66基で、観音が7基と多く、そのすべてが浄心寺境内に
あります。



石仏豆知識 3. 月待塔

私たちの祖先は太古の昔から月を愛で、また畏敬の念をもって月を崇めてきました。

つきまち
月待とは特定の月齢の夜に講の仲間が集まり、飲食を共にしながら月の出を待つ民間信仰の行事で、地方によって待つ月の月齢は十九夜、二十二夜など様々ですが、二十三夜（下弦の月）の月待行事は全国的に見られ、平塚市内では豊田本郷、下島、上吉沢などの地区で行われていました。そして講の仲間が資金を出し合って建てたのが二十三夜塔です。石塔には、「二十三夜塔」や「三夜待」などの文字の他に、仏教の教義に基づいて
せしほさつ
勢至菩薩が彫られることもあります。

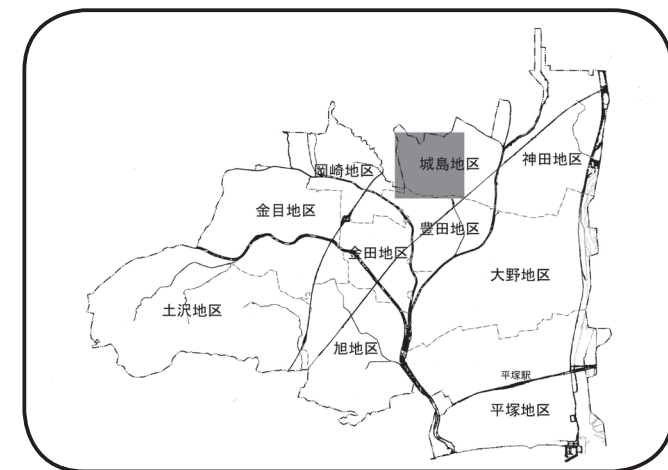
豊田本郷地区の文化 7 年 (1810) の二十三夜夜待講定書によれば、「毎々廿三日戌刻より集合、当番順席茶・煮め、夜食はあずきがゆ小豆粥、二十三夜の月の御昇りを拝し宿散す」(『平塚市史 12 別編民俗』より) とあり、当時は毎月行われていた事が伺えます。月待行事は江戸時代後期から盛んになり戦前まで行われてきましたが、現在では信仰の証として建てられた石塔を見るのみで、実際の行事はほとんど見ることはできません。

因みに月は地球の周りを約 29.5 日かけて公転しており、地球と月と太陽の位置関係から月の満ち欠けが生じます。空の月が一番欠けた状態の新月（月齢 0）から、約 15 日たつと満月となり更に約 15 日たつと再び新月となります。旧暦では新月を毎月 1 日とし、約 30 日を一ヶ月としていました。

小鍋島・城所の石仏所在地と主な石仏

番号	名 称	住 所	主 な 石 仏
1	小鍋島路傍	小鍋島 1 南河内	庚申塔、道標、道祖神
2	小鍋島路傍	小鍋島 1341 金分	石祠
3	小鍋島路傍	小鍋島 1179 東 橋下	道祖神
4	小鍋島路傍	小鍋島 640 久保田	地藏、庚申塔、道標
5	興淵寺	小鍋島 1153 田中	六地藏、神体石、観音他
6	小鍋島路傍	小鍋島 279 十九町	道祖神
7	慶徳寺	小鍋島 924- イ 宮ノ前	六地藏
8	八幡神社	小鍋島 965-1 宮ノ前	庚申塔、手水石、廻国塔
9	小鍋島三叉路	小鍋島 596-2 久保田	巡拝塔道標
10	小鍋島路傍	小鍋島 1650 南 城東	道祖神道標
11	小鍋島路傍	小鍋島 1119 城東	動物供養塔
12	小鍋島畑中	小鍋島 1122 付近 城東	地藏、馬頭観音、廻国塔
13	日枝神社	小鍋島 1714 西 城東	石祠、五輪塔、庚申塔
14	城所三叉路	城所 955 瀬戸ノ田	庚申塔道標、道祖神
15	城所十字路	城所 713 東 毛配面	庚申塔道標、道祖神、 稲荷、地藏、馬頭観音
16	城所路傍	城所 841-1	庚申塔道標
17	城所三叉路	城所 835 小島	道祖神
18	城所六叉路	城所 449 稲岡	地藏、馬頭観音道標
19	城所路傍	城所 456 西 岡の根	道祖神
20	浄心寺	城所 375 宮ノ下	観音、地藏、宝篋印塔、 六地藏、宝塔他
21	観音堂	城所 375 宮ノ下	観音、大日如来、名号塔、 地藏、巡拝塔、輪廻塔他
22	城所路傍	城所 1489 宮ノ跡	道祖神
23	貴船神社	城所 344 宮ノ下	牛、庚申塔、二十三夜塔他
24	城所路傍	城所 344 宮ノ下	万霊塔
25	城所十字路	城所 250 大手洗	道祖神

※ 当ガイドマップに記載されている石仏の基数は平成 26 年集計時点のものです。



石仏めぐりを行う場合の心掛け

石仏は、古来より多くの人々がさまざまな願いをこめて手を合わせ祈ってきたものです。今でも信仰の対象とされているものも数多くありますので、見学に当たっては、敬いの心を持って接しましょう。

また、お寺や神社など石仏の管理者がいらっしゃる場合は、石仏を見学する旨一声かけてから見学しましょう。

平塚の石仏めぐり (5.小鍋島・城所編)
発行日：令和元年 10 月
編 集：石仏を調べる会
発 行：平塚市博物館
住 所：神奈川県平塚市浅間町 12-41
電 話：0463-33-5111

小鍋島八幡神社の庚申塔 (地図番号⑧)

この庚申塔は、正面の青面金剛が尖頭、六手で両手を合掌し、弓と矢を持ち、上部の手には月と日を捧げています。その下には三猿がいます。正面を向かずに横を向いている猿像の庚申塔は市内に 12 基見られ、年銘の判明している中で市内最古のものです。

左右側面の銘文に、「相叒大住郡粕屋莊小鍋嶋村同行拾五人」、「正徳六丙申年」(1716) と刻まれています。



庚申塔 (正徳 6 年)

小鍋島三叉路路傍の巡拝塔道標 (地図番号⑨)

この百番観音供養塔は天保 12 年(1841)に小鍋島村、城所村、小稲葉村の願主四名が出羽三山と百番観音霊場(西国・秩父・坂東)を巡礼し参拝を成就した記念に建立されたと思われます。

この石塔は道標も兼ねており、坂東三十三観音のうち近隣の六番「いい山」(厚木市)、七番「かなひ」(平塚市)および八番「ほしのや」(座間市)の行先が刻まれています。



巡拝塔道標 (天保 12 年)

城所三叉路路傍の庚申塔道標 (地図番号⑭)

慶応 4 年(1868)に再建された高さ 130cm の庚申塔で、「塔」の文字には異体字が使われた珍しいものです。道標を兼ね、両側面には行先「此方藤澤、田村」、「此方 十日市場、金目」の地名が草書体で彫られています。

台石には講中、世話人 17 人の名前が彫られています。城所に庚申塔は六基建てられていますが、講中を確定できるのは、このシモの塔だけです。



庚申塔 (慶応 4 年)

城所地藏堂の地藏 (地図番号⑮)

十字路に面した地藏堂に、シモで供養する丸彫立像の地藏(造立年代不詳)が祀られています。地藏堂は平成 8 年に再建され、堂内に地藏二体と馬頭観音二基があります。

昔から地藏念仏が 8 月 23 日に行われており、現在もこの場所で続けられています。

また、敷地内にはシモの道祖神、道標を兼ねた庚申塔、稲荷(石祠型)が並置されています。



地藏 (年代不詳)

城所六差路路傍の地藏と馬頭観音道標 (地図番号⑱)

このお地藏さんは馬頭観音塔の上に乗っており、岡の根と城東の六つ角の境に位置し、戦前までは 8 月 24 日に地藏尊の前で念仏を唱える地藏講が行われていました。また、現在は野ざらしになっていますが、平成 22 年までは小屋掛けされた中に安置されていました。

下部の石塔は文化 11 年(1814)に岡の根の人々が造立した馬頭観音で、道標を兼ねています。



地藏と馬頭観音道標 (文化 11 年)

城所路傍の道祖神 (地図番号⑲)

オカンネーの道祖神と呼ばれ、岡の根地区で祀る舟型の双体道祖神で、正面左右に「道祖神 宝暦七丁丑(1757)三月十四日」と刻まれています。上部が欠損し一部判別できなくなりました。道祖神の周囲には沢山の五輪塔の空風輪や宝篋印塔の残欠が積まれています。

この道祖神場は、当初道を隔てた反対側にありましたが、二転三転し現在地に設置されたものです。



双体道祖神(宝暦 7 年)

貴船神社の石仏 (地図番号㉓)

貴船神社は水を司る竜神を祀る城所の鎮守で、かつては裏山の高いところにあったが、戦時下に現在地に遷されました。境内にある三面大荒神社の前に笠付円柱の二十三夜塔と立派な牛像が建っています。

二十三夜塔 二十三夜とは旧暦の 23 日の夜に講中の人々が集まり月待をする行事で、市内には 6 か所に二十三夜塔が建てられています。この塔は、明治 20 年(1887)に矢羽根の石塚氏の祖先が建立されたもので、正面に「二十三夜」と本尊の勢至菩薩「勢至大薩埵」の文字が彫られています。

牛像 この牛像は、二十三夜塔と同じく石塚氏の祖先が、日露戦争戦勝祈願のため、明治 37 年(1904)当時山の上にあった三面大荒神社に奉納したもので、一時行方不明になっていたが発見され、現在地に設置されました。頭の位置が反対の同形の牛像が石塚氏の宅地内にもあります。



二十三夜塔 (明治 20 年)



牛像 (明治 37 年)

浄心寺の石仏 (地図番号㉔)

浄心寺は曹洞宗の寺院で、本尊は福德・知恵ともに広大無辺の虚空蔵菩薩です。この菩薩は十三仏では最後の三十三回忌の主尊となり、十三歳になると知恵を授かりに行く十三参りの仏様として古くから身近な菩薩であります。本尊としては珍しい菩薩です。また本堂には境内から出土した室町時代前期の板碑や木造の村方持回り地藏が展示してあります。

六観音 中門前右側に三体の観音菩薩立像が並んでいます。何れも年代不詳ですが、立像で像高、材質が同じで六観音として建立されたものと思われます。向かって左より聖観音、如意輪観音、千手観音です。如意輪観音の思惟立像はあまり見かけません。六観音は十一面観音、馬頭観音、不空罽索観音が加わるわけですが境内には見当たりません。

読誦塔 文政 9 年(1826)建立の塔は劣化のため平成 13 年に更新されました。塔身には阿弥陀三尊の種子に代え、山号の明王山及び本尊に関わる諸尊共通種子である樺と憾に聖観音像が彫られ、基礎に観音経千巻読誦、92 名の発願者、信州の石工名などが復刻されました。

子育て地藏 中門の脇に子どもを膝上に抱く安政 3 年(1856)建立の地藏菩薩が安置されています。台石の正面には「毎日朝夕に地藏尊にお祈りし、現世から後世に至るまで衆生の子育てがしっかり成されますように」という意味の偈頌が彫られ、当山 22 世が請願し建立されました。左右には世話人 6 名と浄財 3 両 2 分の提供者、信州住人の石工幸蔵などが彫ってあります。

宝塔 本堂の左側前に、塔身正面に二尊仏を彫った珍しい宝塔があります。宝暦 8 年(1758)建立と衆生の安泰や地獄・餓鬼・畜生道には永久に落ちないことを願う銘文が塔身の三面に彫られ、台座は蓮華座と反花の複弁といった本格的な宝塔ですが、残念ながら剥離が進行中です。



六観音の一部 (年代不詳)



読誦塔 (平成 13 年)



子育て地藏(安政 3 年)



宝塔(宝暦 8 年)

観音堂の石仏 (地図番号㉕)

浄心寺入口右手にある観音堂(本尊千手観音)は、かつて大手先の台地にあり別当城所寺(『吾妻鏡』に記す頼朝が政子の安産祈願を行った常蘇寺のことで、後に転訛)とともに明治 8 年(1875)に焼失しました。観音堂は明治時代に建て直され、その後新幹線工事に台地の土を提供するため、昭和 37 ～ 8 年に石造物とともに浄心寺境内に遷されました。

千手観音座像 千手観音は変化観音の一つで、千の慈手、千の慈眼で、衆生を済度する観音です。こちらの観音様もたくさんの手が彫られ様々な願いを受け止めてくれています。

台石正面には、「天明五乙巳年」(1785)「當所 観音講中」、台石右面には、「補陀落山城所寺 相模三十二番」と刻まれています。銘文から相模国三十二番札所であったことがわかります。

地藏立像 (天明元年(1781)造立)

台石正面には「願以此功德 普及於一切 我等與衆生 皆共成仏道」という経文(偈頌)があります。意味は唱えた経文の功德が全てに行きわたり、皆と共に仏さまの教えによって救われることを願う回向文です。出典は法華經化城喻品です。市内の石造物に最も多く刻まれている偈頌で、28 基の石造物に刻まれています。

巡拝塔 (文化 12 年(1815)造立)

正面に「月山 湯殿山 羽黒山」と「西国 坂東 秩父百番供養塔」と刻まれています。修験道で名高い出羽三山と西国を含めた百の観音霊場の巡礼を成就し、その記念に建てたものです。市内には出羽三山の名と百番観音の名が刻まれている巡拝塔は 8 基あります。正面の刻像は湯殿山の本地仏の金剛界大日如来座像です。

輪廻塔 (文政 6 年(1823)造立)

石柱の中程を四角にくりぬぎ、中に円盤状の石盤(消失)をはめ込んだ石塔です。消失前の石盤外周には「南無阿凶弥陀仏吉」と刻まれていました。「南無阿弥陀仏」と「吉凶」を組み合わせたものです。このような石盤で「吉凶」を占うことは自分の運勢を仏に帰依して仏の意志に委ねる事です。市内に 1 基で大変貴重なものでした。



千手観音(天明 5 年)



地藏 (天明元年)



大日 出羽三山 巡拝塔 (文化 12 年)



輪廻塔 (文政 6 年)